S. Ashina

前期：キリスト教と近代的知――宗教哲学構想

オリエンテーション――「キリスト教と近代社会の諸問題」

１．前年度のまとめ――象徴論・言語論

２．近代/ポスト近代と宗教哲学構想

　２－１：近代の知的状況における宗教思想

　２－２：批判哲学から批判的実在論へ

　２－３：シュライアマハーの宗教哲学

　２－４：ティリッヒの宗教哲学

　２－５：波多野精一の宗教哲学

　　１：波多野宗教哲学と実在論

　　２：波多野宗教哲学の方法論、そして象徴論 7/8

　２－６：ヒックと批判的実在論 7/15

　２－７：言語から宗教的実在へ

　　１：リクールと解釈学的プロセス 7/22

　　２：イエスの譬えの読解プロセス 7/29

　２－８：言語論と宗教哲学 10/7

　２－９：次元論と宗教哲学 10/14

後期：キリスト教と社会理論――経済と環境

＜前回＞ティリッヒの神話論

（１）ブルトマン――神話・神話論・世界観・科学

０．ブルトマンの実存論的神学の構図（参考資料**＜ブルトマン＞**より）

1) 信仰と世界観との区別・相違

主体的決断と客体化・対象化（偶像・支配の欲望）←キルケゴール的モチーフ

・聴く（聴従、Gehorsam）：

神の語りかけ→説教→決断：現在の出来事（言葉の出来事）

現在的終末

神の本質的な非対象性

・見る：世界像・世界観

2) 世界像・世界観

古代（黙示的、グノーシス主義的）／現代（科学的）

信仰とは世界像からの自由・解放である。

3) 聖書における神話論と非神話論化

聖書においては宣教（Kerygma）のメッセージを表現するために、先行する宗教的伝統（古い神話）から様々な表象が受け継がれ、神話的表現が行われる。しかし、パウロとヨハネにおいて、すでに神の客体化・対象化の克服が行われている。

パウロ：肉によるキリスト

ヨハネ：「しるし」批判

4) 現代人の世界観としての科学的世界観

聖書的世界観（古代の世界観）の強制は、知性の犠牲である。

ブルトマンの近代性

5) 神話論からの脱却としての非神話論化

神話が表現しようと本来意図している信仰（実存的自己理解）を取り出すこと。その方法としての、実存的解釈。

ここで、ブルトマンはハイデッガーを参照する。

↓

神話という語り方の承認と、その客体化（神話論化）の拒否

非神話化ではなく、非神話論化（Entmythologisierung）。

非神話化は誤訳か？　あるいは、ブルトマンの曖昧さか？

（２）ティリッヒの神話論

１．ティリッヒによる神話論の概要

消極的な理論：還元主義的な神話論、神話を社会的心理的な作用・領域へ還元する。

寓意的な諸理論(die *allegorische*)、心理学的な諸理論

積極的な理論：神話自体の論理構造から神話を論じる。

シェリング（象徴的、現実主義的な理論）die bedeutungsvollste *metaphysische* Theorie

カッシーラー（認識論的理論）die *erkenntnistheoretische* Theorie

２．批判哲学→文化の哲学へ

３．カッシーラーの象徴形式の哲学における神話論

４．シェリングの実在論

↓

批判哲学＋実在論　→　批判的実在論、超越的実在論

die *symbolisch-realistische* Theorie

（３）キリスト教信仰にとって神話とは何か

６．「非神話的な意識というようなものが存在しうるか」

「歴史的現実と、神話を作り出すところの人間精神の構造」

７．「破られた神話」der *gebrochene M.*

「神的なものを空間と時間のなかへもちきたらし、人間の形姿にかたどって客体化する行為」

「神話の克服」、預言者的、神秘主義的、哲学的

神話は克服されるが、神話の実質は残されている。

「神的なものの無制約的超越についての意識によって破られた神話」、「神話が破られている場合には、神話的なものはあらゆる宗教の一要素」

↓

神話という表現形態にそれにふさわしい位置を与えること。宗教的象徴自体（その対象的形態）と宗教的象徴が指示する実在との区別に基づく、宗教的象徴体系としての神話の存在意義の正当な評価。

２ ― ５ ：波多野精一の宗教哲学

１ ：波多野宗教哲学と実在論

（１）波多野宗教哲学の概要

A.「宗教哲学の本質及其根本問題」(1920)――波多野宗教哲学の原型・原構想

１．「生命活動の深き省察」「学的研究の鋭き反省」　→　生命と学問

２．「第一章　宗教の学的研究において宗教哲学の占むる位置」(175-192)

「第二章　宗教哲学の諸の立場　批判哲学の特質」(192-204)

「第三章　宗教の本質」(205-217)

「第四章　宗教哲学の諸問題　特に神の観念」(217-232)

「第五章　宗教哲学の諸問題　特に救済の観念」(232-242)

S. Ashina

B.『宗教哲学序論』(1940)

合理主義的神論ではなく、宗教哲学

誤れる宗教哲学ではなく、正しい宗教哲学

３．誤れる宗教哲学：合理主義と超自然主義

「カント」「に至ったまでは」「宗教哲学は宗教の対象」「を、通俗的にいえば神を、捉え来つて直接に理論的論究の対象となす哲学であった」「一般認識の方法を」「そのまま神に適用する」(269)

「合理主義」「神を直接の対象としようとする即ち神の学であろうとする点より、かかる哲学はアリストテレス以来「神学」とも呼ばれた」「一般認識と共通の方法によることは、又人間が本性によって、乃至本来即ち自然的に、所有する理性によることである故、この「合理的神学」(rationale Theologie)はまた「自然的神学」(naturakiche Theologie, theologia naturalis)とも名づけられた」「トマス・アクィナス」「神の実在性の証明は神学の全体系を支える緊要欠くべからざる礎石と考えられた」「人間の認識は感性的知覚にはじまり感性的に与えられる事物を最も近き対象として有する故、感性を超越する神の存在は証明によってはじめて到達されるのである」「一旦神の存在が確立された以上は、哲学は更に進んで神が何であるかを」(270)、「例えばその永遠性単一性無限性などを、又世界、しかして特に人間との関係を論究すべき勤務を有する」「これがカント哲学の出現まで一般に行われた宗教哲学の大体の構造である」「合理主義の宗教哲学」「ヘーゲルの如きでさえ、この点に関してなお旧套を脱しきれなかった」(271)

４．「しかして超自然主義はその要求を充たすかに見える」「シュライエルマッヘル以来用い慣れた新しい語義においての神学」(279)、「個々特殊宗教の立場において自己の教義の理論的展開根拠付け弁護等を任務とする学問という意味の神学」「合理主義とは対立の関係に立ち全く異なる傾向を示しながら、宗教の対象を直接に理論的認識の対象とする点においては共通なる哲学的意義を有し従ってここに宗教哲学の一つの立場として検討される資格を有する」「歴史的宗教の」「随伴現象として存在」「学問的体系的の形態を示すものは単独には成立ち難く合理主義と結合して存在する」「トマス・アクィナスは最も影響深き模範」

「この立場は神の超越性を基本原理とする」「人間本来の認識能力即ち理性を全く超越する」「人間の有限性より」「罪悪より」「超自然的啓示が」「神の恵みによって」「与えられる」(280)

↓

合理主義と自然主義の真理契機は何か。自然神学と啓示神学という伝統的枠組みの再構築。「神」の対象化を避けつつ、神経験の可能性と現実性を論じる。

５．正しい宗教哲学→宗教的体験の事実性と批判的理解（批判的実在論）

「宗教の学的研究は事実の内面的意味を前提せねばならぬ。この内面的意味は体験において与えられ又知られる。合理主義の宗教哲学と異なって正しき宗教哲学は宗教的体験の反省的自己理解、それの理論的回顧として成立つ。体験の立場に立つものは宗教が他と混同を許さぬ固有の意味内容を有するを知る。かかる意味内容を反省に上せ、それの理論的理解を原理へと推進めて行くものは本質の観照把握に到達してはじめて満足を見る。この本質の理解こそ宗教哲学である。」(314-315)

C.『宗教哲学』(1935)

６．宗教についての哲学→三つの基本的問い

・本質論（宗教とは何か）
・哲学的人間学（なぜ宗教か、人間にとって）
・類型論（宗教の多元性）
　実在する神、「力」の神、
　「真」の神（イデアリスム、神秘主義）、
　「愛」の神（人格主義）

７．「宗教本質論が類型論を必要とすることは、著者が途半ばにはじめて気づいた事柄である。」(3)

「本質論と類型論と哲学的人間学とは相連関し互いに相依り相助けてはじめて宗教の哲学的理解を可能ならしめる。宗教哲学は人間学の根拠を必要とするに相違ないが、後者はいつも宗教的体験を前提としつつそれの言わんと欲する所に虚心坦懐に耳を貸すものでなければならぬ。」「宗教哲学は飽くまでも宗教的体験の理論的回顧、それの反省的自己理解でなければならぬ。」(4)

「宗教的体験において主体の対手をなすものを言い表すため、便宜上、「神」という語を用いた。」(5)

Ｄ．「宗教哲学の本質及其根本問題」(1920)

批判哲学から実在論へ（Ｄ→Ｅ．**『宗教哲学』(1935)**）

批判的実在論

８．批判主義の宗教哲学の構想

「あらゆる宗教研究についての根本的な反省は、すべて必然的に私たちを宗教哲学へまで導いた」「完成者としての哲学を要求する」、「しかしながら哲学は、万人が等しく承認し研究せるものが、ただ一つ存在するのではない」(192)、「いかなる哲学的見地に立ち、いかなる主義を奉じ、いかなる考え方に従うべきかに関して、あらかじめ私たちの態度を決定しておかねばならない」、「カントによって創出された批判主義」

「批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粋理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるということができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」(201)

「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」(201)

「第一、批判主義は形式的理想主義である」「事実から独立に、当に然かあるべしという資格を有する即ち妥当する価値を主張する」「存在よりも当為に、事実よりも規範に重きをおく」、「事実問題ではなく権利問題」「人々は当為もしくは価値の能力を、理性と呼び慣わしてきた。このような理性の立場に立って、批判主義はすべての問題を解決しようとする。即ち批判哲学は理性の哲学であり、批判主義は理想主義である」(202)

「第二、批判主義は反主知主義である」「諸の文化領域を公平に尊重する」、「理性は」「理論理性」「のみを意味しない」、「普遍妥当的なる価値がある限り」「その根底には理性の存在が承認されねばならぬ。理性とはあらゆる種類の普遍妥当的価値の全体の謂いである。それ故に私たちは理論的ならざる理性の存在と権利とを十分に肯定する」、「宗教は、主知主義の人々が誤って観念するように、知識の変形もしくは不完全なる知識ではなく、私

たちに対しては、理性の特色ある一領域として、自己の独立性を確保することができるのである。」(204)

（２）宗教的実在論

Ｅ.『宗教哲学』(1935)

高次の実在主義

９．実在論的宗教哲学

「シュライエルマッヘルは宗教の立場を「高次の実在主義」と呼んだ。宗教において自我は現実世界を超えて遙かに高き実在との関係に入る。宗教はその対象の実在性を無制約的に肯定する。」「我々自らの力をもって左右し得ぬ、一種の事実性、一種の所与性を与える。」(7)

「「実在感」(sense of reality--W.James)」、「我々の第一の中心の関心事はいつも「あり」である」、「宗教が道徳や芸術とは区別せられる自らの世界を形作っているのも、一にはここにその根拠を有する」、「経験的意識の実在主義と認識論上の観念主義」(8)

「常識と科学と哲学と」、「究極の立場としての実在主義」(9)

「消極哲学」「原始仏教」「「聖なるもの」」(10)

「表象的観念的表現における消極性が、むしろ体験における対象の極度の積極性を意味することは、所謂「消極神学」においては一層明瞭に現れている。」(12)

10. 宗教と形而上学

「かくの如く宗教の対象が絶対的実在であるとしたならば、宗教は形而上学と何等か特に注目すべき関係に立たねばならぬことは明らかとなろう。」(17)

「現象的経験的相対的実在――経験科学の対象をなす実在の世界に対して絶対的実在を立て、これをそれの思索、それの学的研究の対象となすのが形而上学である。」(18)

「真に形而上学を成立たしめる中心的勢力は、宗教的体験を措いて、いずこに求め得るであろうか。」(23)

「神話や教義や、一般的にいえば宗教的表象が、決して宗教そのものではないことである。宗教的表象は宗教的体験の外に向かっての表現として、社会的文化的には宗教の極めて重要なる要素をなしている。」(25)

「思惟や認識が、あるいは神との生の共同として、あるいは人間における神の啓示として、真に体験され、真に福なる生、永遠なる生がそこに見出されるところには、思想家自身がそれを宗教と呼ぶを肯ずるにせよ、肯ぜぬにせよ、宗教はまさしく成立っていると認めねばならぬ」、「すべての宗教は形而上学を萌芽として自己のうちに含意する。また逆に世界の意識より出発する哲学も、それが真に形而上学であり得んためには、宗教と結びつき、宗教的内容の表現乃至展開としての意義を発揮せねばならぬ。神に終わろうとする形而上学も、真に形而上学である限り、神に始まるを知らねばならぬ。宗教はすべての形而上学の魂であり生命の泉である。」(27)

11. 実在→力（活動・作用・効果）：現代宗教学を射程に入れた宗教哲学

宗教現象学

「宗教の対象が実在する神に存すること」「宗教的体験の最も基本的なる、しかし同時に最も抽象的なる本質規定である。」「実在は意志体験において与えられる。実在するということは、意志に対して、それの前面に立ち塞がるもの、それの進行を遮るもの、それに向かって抵抗を与え乃至は拘束を加えるものとして、すなわち畢竟、それに働きかける力として、それとの交渉において立つ意志的存在者として存在するを意味する。それゆえ、実在する神は、それの本質連関上、同時に力の神でなければならぬ。」(68)

＜参考文献＞

１．『波多野精一全集』全六巻、岩波書店、1969 年。
２．論集
・石原謙編『哲学及び宗教と其歴史――波多野精一先生献呈論文集』岩波書店。
・石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己
『宗教と哲学の根本にあるもの――波多野精一博士の学業について』岩波書店。
・『追憶の波多野精一先生』玉川大学出版部。
・京都哲学会『哲学研究』第 406 号（波多野精一博士追悼号）。
３．研究書
・浜田与助『波多野宗教哲学』玉川大学出版部。
・宮本武之助『人と思想シリーズ　波多野精一』日本基督教団出版部。
『宮本武之助著作集　上下』新教出版社。
・側瀬　登『時間と対話的原理――波多野精一とマルチン・ブーバー』晃洋書房。
４．思想史の中の波多野
・湯浅泰雄『日本哲学・思想（Ⅳ）』（『湯浅泰雄全集第十一巻』←『近代日本の哲学の実存思想』創文社、1970年）白亜書房、2005年。
「日本における西洋近代思想の受容」「三　自我の否定――田辺・波多野哲学」
「近代日本の哲学の実存思想」「第一章四　波多野精一――内をみる自我」
・古屋安雄他　『日本神学史』ヨルダン社、1992 年。
・石田慶和　『日本の宗教哲学』創文社、1993 年。
・小野寺功　『絶対無と神――京都学派の哲学』春風社、2002 年。
５．研究論文
・安藤恵崇「時と永遠への思索――波多野精一」、藤田正勝編『日本近代思想を学ぶ人のために』世界思想社、1997 年、118-135 頁。
・片柳栄一「時と永遠――波多野精一」、常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998 年、257-286 頁。
・原口尚彰「日本新約聖書学史における波多野精一」、『キリスト教史学』（キリスト教史学会）第 60 集、2006 年、87-102 頁。
・村松晋「波多野精一と敗戦」、『聖学院大学論叢』第 19 巻第 1 号、2006 年、63-72 頁。
「波多野精一の時代認識」、『聖学院大学論叢』第 19 巻第 2 号、2007 年、140-146 頁。
・鵜沼裕子「日本キリスト教史における「他者」理解をめぐって　波多野精一の場合」、『聖学院大学総合研究所紀要』第 41 号、2007 年、132-160 頁。
・佐藤啓介「愛ゆえに、我在り――田辺、波多野、マリオンと存在－愛－論」、片柳栄一編『ディアロゴス――手探りの中の対話』晃洋書房、2007 年、216-236 頁。
「波多野精一の存在－愛－論」、『日本の神学』46、2007 年、31-52 頁。
「神の言葉の器としての人間――波多野精一の象徴論の存在論的再解釈をめざして」、『聖学院大学論叢』第 22 巻第 1 号、2009 年、181-189 頁。
・芦名定道「日本の宗教哲学とその諸問題――波多野、有賀、北森」、『アジア・キリスト教・多元性』（現代キリスト教思想研究会）第 9 号、2011 年、89-111 頁。